

# ライフコースにおける社会的コンボイに関する展望

## The view about the social convoy in life course

藤原善美

### 1. ライフコース理論

#### 1-1 ライフコースとは

Elder(1985)は、ライフコースとは年齢によって区別された生涯を通じてのいくつかのトラジェクトリ(軌跡、trajectory)であり、人生上の出来事(events)についての時機(timing)、持続時間(duration)、配置(spacing)および順序(order)にみられる社会的パターンであると定義した。

また、ライフコースについて多角的な視点から理解するために、ライフコースに関する他の説明を紹介する。Giele & Elder(1998)は、ライフコースとは個人が時間の経過の中で演じる社会的に定義された出来事や役割の配列(sequence)のことであるとした。そして、Clausen(1998)は、ライフコースとは個人が無力状態の有機体(helpless organism)から自律した個人(autonomous person)へと変容していく発達の過程であるとした。

ライフコースと相互互換的に使用される概念として、ライフサイクル(生活周期、life cycle)、ライフスパン(生涯、life span)、ライフヒストリー(生活史、life history)がある(Cairns, Elder, & Costello, 1996)。これらの概念とライフコースとは年齢と時間的变化という点で共通する(本田, 2001)が、人生の捉え方には相違がある。

ライフコースという概念の内容について明確にする為に主な類似概念であるライフサイクルとの相違点について説明する。

ライフサイクルは、生活周期(生活環)ともいい、生物である個体の出生、成長、死亡という時間経過による規則的变化の過程のことである。ライフサイ

クルの概念と比べて、ライフコースの概念はあらかじめ決まった配列で必ずしも進行せず、時間の経過において個人が実際に経験したことの総体をなす多くのさまざまな出来事や役割を考慮する点で異なっている (Elder, 1975)。現代では人の一生における変化の規則性が柔軟化している為、ライフサイクルという概念だけでは把握できない現象が生じており、ライフコースという概念を用いることによって多様な人生パターンの説明が可能になるだろう。

また、ライフコースの概念はその個人の外部で発生する歴史事件や社会的相互作用を記号化することを可能にする (Giele & Elder, 1998)。森岡 (1996) は、ライフコースと比較するとライフサイクルの研究は個人や家族の内面の変化に注目しているが、外部での変化の影響を無視する傾向があるとした (本田, 2001)。

Elder(1994; 1997)は、ライフコースを規定する4つの要因として、歴史的・地理的な位置 (historical and geographical location)、他者との関係 (social ties to others)、個人の統制(personal control)、タイミングの変異 (variations in timing)を挙げた。またGiele(1995)は、文化的背景(cultural background)、社会的所属(social membership)、個人的目標志向性(individual goal orientation)、戦略的適応(strategic adaptation)の4つの要素を挙げた。

この2つのライフコースの規定要因についての枠組みを統合して、ライフコース・パラダイムの4つの基本的要素が提唱された (Giele & Elder, 1998)。以下のライフコース理論の4つの原則は、ライフコースの規定要因を考える上で不可欠なものである。なお、4つの原則はElder(1994; 1997)に拠り、( )内はこれらの原則を「要素」として置き換えたGiele & Elder(1998)に拠るものである。

- ① 時間と場所の位置 (location in time and place) (文化的背景 (cultural background))
- ② 「人生におけるタイミング (timing of lives)」 (戦略的適応 (strategic

adaption) )

- ③ 「リンクされた人生 (linked lives)」 (社会的統合 (social integration))
- ④ 「人間のエージェンシー (human agency)」 (個人的目標志向性 (individual goal orientation))

① は社会文化的環境によって決定され、ライフコースの規定要因を考える上でもっとも重要であるとされており、他の3つの原則は個人差を説明するために有用だとされている。また、Figure 1-1に表したように、①、③、④は②のタイミングを通してライフコースのトラジェクトリ(軌跡)の差異として現れる。

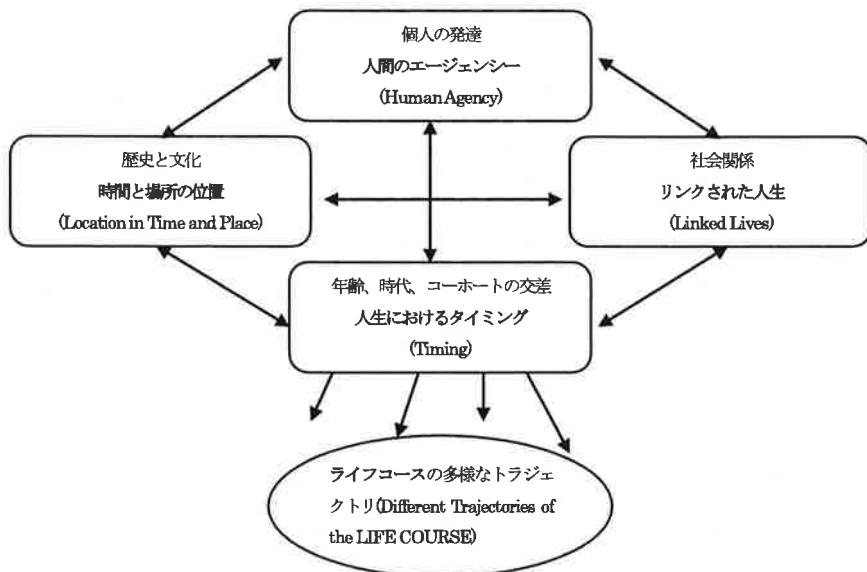


Figure 1-1 ライフコース・パラダイムの4つの基本的要素 (Giele & Elder, 1998)

ライフコースの4つの原則の各々は次のようにまとめられている (Elder, 1997; Giele & Elder, 1998)。

①「時間と場所の位置 (文化的背景)」とは、個々人のライフコースは社会・文化的背景によって形成されるということである。すなわち、ライフコースを形成する個人の行動は時代と社会文化的環境・文脈によって決定される。

②「人生におけるタイミング (戦略的適応)」とは、人生移行 (life transition) やライフイベント (life event) による発達への影響は、これらが人生においてどの時期に起こるかによって異なるということを示す。つまり同じ出来事が発達や年齢の違いによってそれぞれ別の意味を持つことが多い。そして、ある時期において役割を上手に遂行できるかどうかは、知力、体力等の個人的資源や属する社会階層、経済的地位等の社会的資源と歴史的状況によって規定される。

③「リンクされた人生 (社会的統合)」とは、ライフコースは様々な次元が相互作用して形成されているということを示す。すなわち、文化的、制度的、社会的、心理的等の社会的行為のすべての次元は同じような経験を共有した他者との接触の結果として相互作用し、さまざまな期待、規範、社会制度の統合や内在化の程度によって、ライフコースは影響される。したがって重要な他者 (significant others) や個人を取り囲む人々のことをさすコンボイ (convoy) との相互作用がライフコースに影響を及ぼすと想定される。家族背景、職業、教育等の領域で異なる経験をすれば、ライフコースも異なってくるだろう。

ライフコース理論の4つの原則のうち④「人間のエージェンシー (個人的目標志向性)」は、個人が不可避な社会的・文化的環境の中で自らの選択でライフコースを規定しようということである。すなわち、人間はいかなる状況においても自らの選択や行為によって、ライフコースを適応的に構築することができる。

4つの原則各々の例をわかりやすく挙げてみると次のようになる。

「時間と場所の位置 (文化的背景)」については、現代の日本人のライフコー

スを考える上で重要な社会背景のひとつである戦争体験の例を挙げてみると、青年を取り囲む状況は戦後すぐと現在で異なり、また同じ戦後の時代でも日米の青年のライフコースは異なる。このような社会・文化的な要因は従来の生涯発達心理学においては十分に考慮されなかった側面である。

「人生におけるタイミング（戦略的適応）」については、例えば、戦後に成人だったか、子どもだったかで全く異なる経験をすることが挙げられる。また、どの時期に人生移行するかについては、受動的なだけでなく能動的に選択することができるため戦略的適応が可能になる。例えば、経済的苦境に直面した家族出身の少年少女は就職や結婚の時期を早めることによって経済的基盤を確立させる傾向があるかもしれない。

「リンクされた人生（社会的統合）」については、例えば、家族がどのような価値観をもっているかが、子どものライフコースに影響を及ぼすと考えられる。また、子どもの学校のために親が転勤を断ったり、夫の職業への専念をサポートするために妻が自らのキャリアを断念したりというような場合も例として挙げられるだろう。

「人間のエージェンシー（個人的目標志向性）」については、例えば不況下で経済的に困窮した家庭に育った子どもでも、アルバイト等をして家計を支えたり、奨学金を得て学校を卒業する等、自らの意思や行為によって環境に適応したライフコースを形成した者もいるだろう。ライフコースへの歴史や社会からの大きな影響を避けることは難しいが、その一方で個人が安定や苦痛回避のために積極的に意思決定を行い、自らの生活の組織化を行って、新しいライフコースを創造することが可能なのである。

またClausen(1993)は、エージェンシーが成人以降のライフコースに安定と成功を導いたということを示したデータに基づいて、将来設計コンピテンス(planful competence)という概念を提唱した。将来設計コンピテンスとは将来への戦略的な選択をする能力で、自信、知的投資、頼りがいのような特性によって表せる。高い将来設計コンピテンスをもった人のその後の人生における

満足感を検証したところ、高校卒業時に将来設計コンピテンスが高い群は低い群に比べて、高い教育、離婚・再婚の低い経験確率、男性における順調な職業的キャリア、解決困難な危機的出来事の低い経験確率、パーソナリティ特性の高い連続性が示された。さらには、将来設計コンピテンスは、知能指数や親の社会的地位よりも大きな影響を及ぼしていたことが示された。

このようなことから、学生・生徒が達成や精神的健康に効果的なライフコース展望を構築する際に、個人のエージェンシーが環境要因を凌駕して大きな影響力をもつ要因となり得ることが示唆された。したがって、エージェンシーに類似した概念ともいえる個人の「自律性」が、ライフコースに及ぼす影響は大きいと想定される。

## 1-2 ライフコースの類似概念と相違点

各々の用語についてその差異を簡単に説明すると次のようになる。ライフコースは例えば「大学卒業→就職→結婚→子どもの誕生」等のように、実際に生じた出来事や役割に基づいて人生を捉えようとする。一方で、ライフサイクルは例えば「乳児期・幼児期・児童期・青年期・成人期・老人期」等のように発達段階に区分して人生を捉えようとする。ライフスパンは生から死をひとつの区分として人生を捉えようとする。生涯発達心理学におけるように、調査や限定されたものの時間的範囲のことを言う (Cairns, Elder, & Costello, 1996)。ライフヒストリーは生活・出来事などの年代史についての保存された記録や、自己報告された物語等によって人生を捉えようとする。

それでは、ライフコースという概念の内容について明確にする為に主な類似概念であるライフサイクルについて説明する。

ライフサイクルは、生活周期（生活環）ともいい、生物である個体の出生、成長、死亡という時間経過による規則的変化の過程のことである。ライフサイクルの代表的な理論として、Erikson(1950; 1959; 1982)の心理・社会的発達理論、Jung(1933)の理論に基づいたLevinson(1978)の「人生の四季」と

いう考え方がある。

Erikson(1982)が80歳で刊行した『ライフサイクル、その完結 (The life cycle completed)』において、各発達段階 (Table 1-1) のみならず、個人のライフサイクルを超越した世代間のサイクルにも着目しており、ライフサイクルという用語が注目される契機となった。このようにライフサイクルの視点によって発達を捉えることは、人間の一生の規則的変化を理解する上で有用である。

Table 1-1 ライフサイクル (Erikson, 1982/村瀬・近藤訳, 1989)

発達段階	A	B	C	D	E	F	G	H
	心理・性的な段階と 様式	心理・社会的 危機	重要な関係の範 囲	基本 的強 さ	中核の病理 基本的な不 協和傾向	関連する社 会秩序の原 理	総合的 儀式化	儀式主 義
I 乳児期	口唇-呼吸器的、 感覚-筋肉運動的 (取り入れ)	基本的信頼 対 基本的不信	母親的人物	希望	引きこもり	宇宙的秩序	ヌミノ ー스의	偶像崇 拝
II 幼児期 初期	肛門-尿道的、 筋肉的 (把持-排泄的)	自律性 対 恥、疑惑	親的人物	意志	強迫	「法と秩 序」	分別的 (裁判 的)	法律至 上主義
III 遊戯期	幼児-性器的、 移動的 (侵入的、内包的)	自主性 対 罪悪感	基本家族	目的	制止	理想の原型	演劇的	道徳主 義
IV 学童期	「潜伏期」	勤勉性 対 劣等感	「近隣」、学校	適格	不活発	技術的秩序	形式的	形式主 義
V 青年期	思春期	同一性 対 同一性の混乱	仲間集団と外集 団：リーダーシ ップの諸モデル	忠誠	役割拒否	イデオロギ ー的世界観	イデオ ロギー 的	トータ リズム
VI 前成人期	性器期	親密 対 孤立	友情、性愛、競争、 協力の関係にお けるパートナー	愛	排他性	協力と競争 のパターン	提議的	エリー ト意識
VII 成人期	(子孫を生み出す)	生殖性 対 停滞性	(分担する) 労働 と (共有する) 家庭	世話	拒否性	教育と伝統 の思潮	世代継 承的	権威至 上主義
VIII 老年期	(感性的モードの 普遍化)	統合 対 絶望	「人類」 「私の種族」	英知	侮蔑	英知	哲学的	ドグマ ティズ ム

Levinson(1978)の人生の四季の基本となったJung(1933)はライフサイクルを心理学的に理解しようとした第一人者のひとりである。Jung(1933)は、人生を太陽の運行として捉え、少年期、成人前期、中年期、老人期の4つの時期に分けた。時期の移行には転機 (turning point) があり、特に中年への転換期は人生の午前から午後へ移行する「人生の正午」であり、人生最大の危機であるとした。

このようなJung(1933)や、Erikson(1950; 1959; 1982)のライフサイクル理論に基づいて、Levinson(1978)はライフサイクルを誕生から死亡までの過程と捉え、異なる社会・文化で共通するパターンがあるとした。また、ライフサイクルは時期によって質的に異なると捉え、春 (児童期・青年期)、夏 (成人前期)、秋 (中年期)、冬 (老年期) という四季に分けて考えた (Figure 1-2)。これらの質的に異なる発達段階は、どんなことに時間やエネルギーを費やすか等の生活の基本的パターンである生活構造 (life structure) の変化によって生じる。生活構造は、階層・宗教・家族・職業等の「社会文化的環境」、意識的・無意識的な「自己」、恋人、友人、親等の様々な役割による「外界への参加」という3つの側面がある。

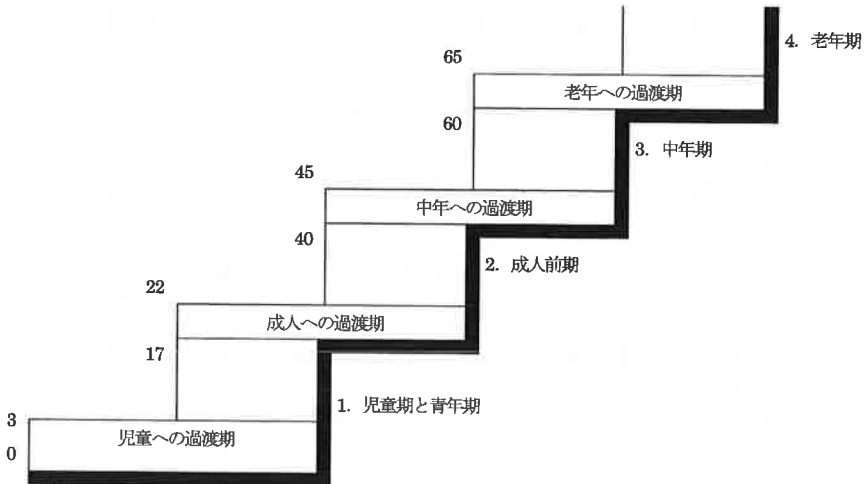


Figure 1-2 アメリカ人男性のライフサイクル (Levinson, 1978)



また、Levinson(1978)は人生の「夏」である成人前期から「秋」である中年期への発達段階を示した (Figure 1-3)。アメリカ人男性の場合40歳ころから中年期への過渡期が生じ、「人生なかばの過渡期」とした。実際にアメリカの35～40歳の男性40名に面接を実施したところ、個人の所属や成功・失敗に関わらず何らかの危機が認められた。

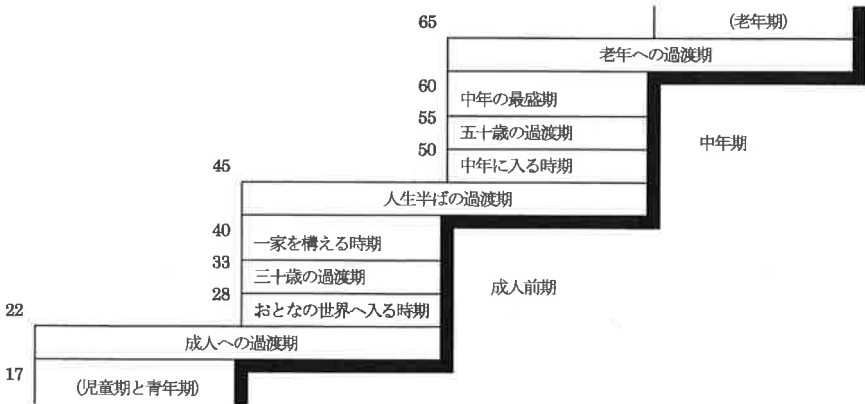


Figure 1-3 アメリカ人男性のライフサイクル (Levinson, 1978)

このようにJung(1933)やLevinson(1978)が中年以降に焦点をあてて人生を捉えたことは、生まれてから青年期までを中心にしてきた従来の発達心理学の観点を、生涯に広げる契機となった。ライフサイクルは一生の身体・心理的变化の規則性に焦点をあてており、生涯発達の観点から人間の発達を理解する際に重要となる概念である。

年齢:	0歳	10歳	20歳	30歳	40歳	50歳	60歳	70歳	80歳	
社会的ト ラジェク トリ	家族:	親の家に居る (定位家族)		結婚 出産・子育て (生殖家族)		空の巣				
	レジャー	遊び・遊戯				余暇				
	教育:	幼稚園・小学校・中学校・高校・大学 (各種の塾)					(寿大学)			
	労働:	お手伝い		アルバイト 就業 (パート含む)						
	経済:	依存期		独立期		援助期		独立・依存期		
発達のト ラジェク トリ	知的機能:	感覚運動・前操作的思考・具体的操作・形式的操作								
	依存性:	発達の			社会的			実存的		
	身体:	伸長期・充実期・伸長期・充実期・思春期								

Figure 1-4 ライフコース、トラジェクトリの模式図 (木田, 2001)

Holmes & Rahe(1967)はライフイベントとストレスの関係を明らかにした (Table 1-2)。ネガティブなライフイベントだけではなく、ポジティブなライフイベントも再適応が困難になる場合があることが示されている。生活変化単位 (Life Change Unit: LCU) の合計得点が年間200~300点だった人の50%が、300点以上だった人の80%が翌年に健康問題を生じるという。

このようなライフイベントの経験による適応・不適応への過程は、Hultsh & Plemons(1979)によってモデル化された。ライフイベントには、結婚や就職等の個人的イベントと、戦争や不況等の社会・文化的イベントがある。このようなライフイベントは、生物学的要因・心理学的要因・文脈的要因を媒介して、その脅威について評価され、対処方略の選択と実行がなされ、成功すればホメオスタシス、失敗すれば対処方略の修正の成功によって適応、あるいは失敗によって不適応になるとした。

Table 1-2 社会的再適応尺度 (Social Readjustment Rating Scale) (Holmes &amp; Rahe, 1967)

順位	ライフイベント	LCU 得点
1	配偶者の死亡	100
2	離婚	73
3	夫婦別居	65
4	刑務所等への収容	63
5	近親者の死亡	63
6	本人の大きな怪我や病気	53
7	結婚	50
8	失業	47
9	夫婦の和解	45
10	退職・引退	45
11	家族成員の健康面・行動面での大きな変化	44
12	妊娠	40
13	性生活の困難	39
14	新しい家族成員の加入	39
15	合併・組織替え等の大きな変化	39
16	家計状態の大きな変化	38
17	親友の死亡	37
18	転勤・配置転換	36
19	夫婦の口論回数での大きな変化	35
20	1万ドル以上の借金	31
21	借金やローンの抵当流れ	30
22	仕事上の責任(地位)の大きな変化	29
23	子女の離婚	29
24	義理の親族とのトラブル	29
25	個人的な成功	28
26	妻の就職または退職	26
27	本人の進学または卒業	26
28	生活条件の変化(家の新築、環境悪化)	25
29	個人的習慣の変更	24
30	職場の上司とのトラブル	23
31	勤務時間や労働条件の大きな変化	20
32	転居	20
33	転校	20
34	レクリエーションのタイプや量の大きな変化	19
35	宗教(教会)活動における大きな変化	19
36	社会(社交)活動における大きな変化	18
37	1万ドル以下の借金	17
38	睡眠習慣の大きな変化	16
39	団聚する家族成員の数の大きな変化	15
40	食事習慣の大きな変化	15
41	長期休暇	13
42	クリスマス	12
43	信号無視等のちょっとした法律違反	11

さて、具体的にどのようなライフイベントが転機として経験されるのだろうか。Clausen(1995)は、パークレー縦断パネル研究の1920年代生まれのアメリカ人男女60名を対象とした面接調査における転機についての回答の結果に基づいて、アメリカ人が経験する転機をもたらした出来事を分類した (Table 1-3)。その結果、職業と家庭の領域に転機が経験されやすいことが示された。また男女差もみられ、男性の場合は上司・仕事の内容の変化のような職業のトラジェクトリ上の経験、女性の場合は結婚・出産後の再就職に代表される職業と家庭のトラジェクトリが交差する経験が転機として認識されることが多い。

Table 1-3 パークレー縦断パネル研究対象者の転機をもたらした出来事 (Clausen, 1995)

	男性	女性
	N=32	N=28
仕事上の出来事ないし状況	66	50
結婚	56	57
軍役	34	0
大学ないし教育経験	31	21
子ども時代の出来事	22	11
離婚	28	14
子育て	28	35
自身の病気や怪我	19	18
家族成員の死	9	32
心理的危機	9	11
居住地の病気	9	36
配偶者の病気	0	11
アイデンティティの探求	6	14
子の独立	0	12
その他	28	49

%、複数回答

移行の分類については、Minami(1987)がHopson & Adams(1976)とSchlossberg(1981)に基づいて作成した (Table 1-4)。いずれにしても移行前後で大きな変化が生じるため、心理・社会的危機が内包されている。このような危機的移行 (critical transition) は、人間—環境システムの急激な崩壊と定義されている (Wapner, 1983)。危機的移行においては、それまで安定していた人間と環境の不均衡が生じ、人間と環境の新しい均衡を形成しなければいけない状況になる。

Table 1-4 分類体系：異なった移行の型に対する事件の初速面 (Minami, 1987)

事件の側面	移行の型：両極のカテゴリー	
A. 評価		
1) 個人の想定、目標、かわり合いについての重要性	軽少 [旅行、ちょっとしたけが、口論、天候の変化]	危機的 [移民、離婚、配偶者の死、戦争]
2) 比較		
a) 社会的・個人的価値と標準	肯定的 [昇進、結婚、卒業]	否定的 [失業、身体障害、投獄]
b) 移行前の状態	付加的 [遺産相続、結婚、子どもの誕生]	喪失的 [破産、離婚、別居、身体障害]
B. 事件の生起に関する期待と予期	予期可能 [入学、退職、結婚、子どもの誕生]	予期不能 [事故、病気、自然災害]
C. 事件の開始に対するコントロール	自発的 [昇進、移民、旅行]	非自発的 [投獄、徴兵、入院、失業]
D. 時間		
1) 事件の開始	漸次的 [性的成熟、老化、工業化]	突発的 [事故、自然災害、家事、心臓マヒ]
2) 事件の持続	一時的 [旅行、小さな手術、一時帰休]	永続的 [鼎化、他者の死、慢性病]
E. 時間的—空間的尺度	マイクロ [日常の移動、天候の変化、役割変更]	マクロ [移民、革命、結婚]

Note. [ ]は例を示す。山本・Wapner (1992) を参照。

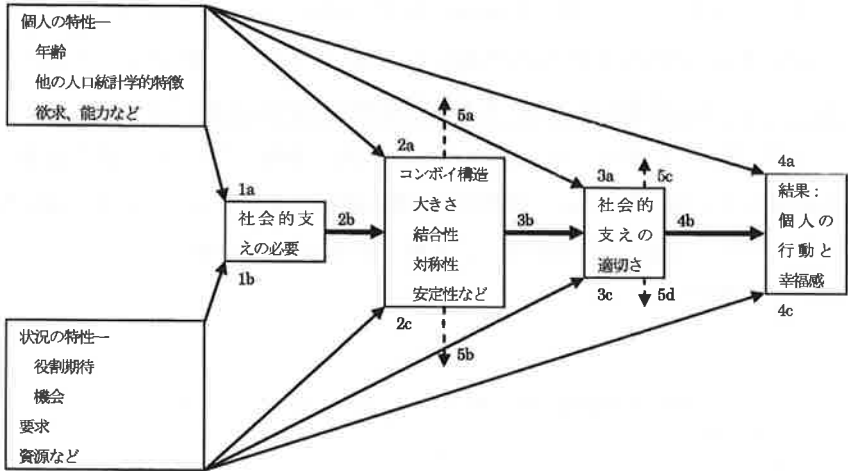


Figure 1-5 コンボイの特性を規定する要因と及ぼす影響の仮説 (Kahn & Antonucci, 1980)

## 2. コンボイ

### 2-1 コンボイにおける同心円

社会的コンボイとは、個人をとりまく家族や同僚、友人などの2人以上の人の力学的な進行中の関係を示す。

Kahn & Antonucci(1980)は、コンボイを個人の円をとりまくいくつかの同心円によって示した (Figure 1-6)。中心の円 (P) は問題、焦点となる人を、その周囲の3つの同心円がコンボイを示す。コンボイの調査の際には、このような個人を取り巻く3つの円でイメージされたコンボイの各領域に該当するメンバーを挙げさせるのだが、これをConvoy Mapping Procedure(CMP)という。

第1の同心円は、配偶者や親友、特に親密な家族成員のように、個人にとって最も親密で役割に関係ない固定的なコンボイの成員をさす。その周りの第2の同心円は、家族や親戚、職場や近所の親しい友人などのように、役割の変化にある程度影響され、時間の経過とともに変化するコンボイの成員をさす。最

も外側の第3の同心円は、上司、同僚、隣人などのように、役割の変化に大きく影響される構成員をさす。特に、第1の同心円がそもそも存在するのかどうかと、どれだけ多くの人が含まれるのかが幸福感やストレス対処能力の予測因子になるとされる。

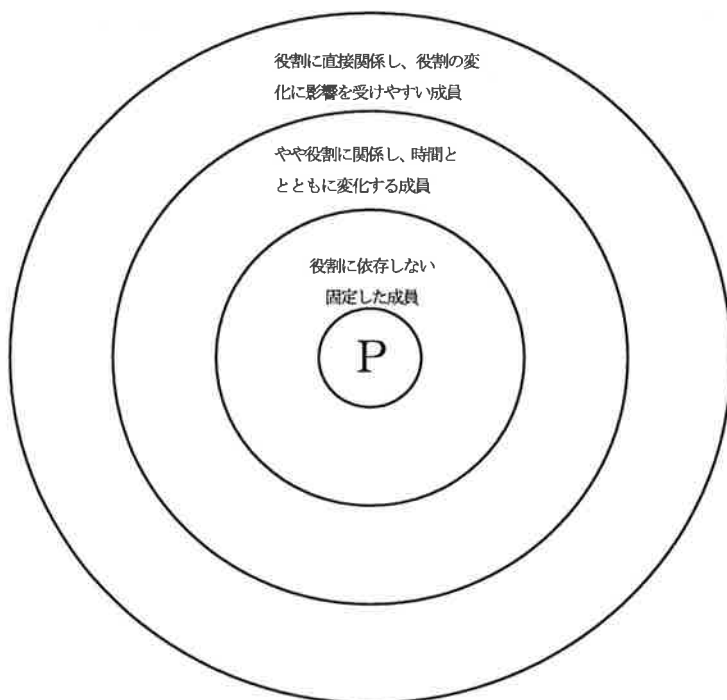
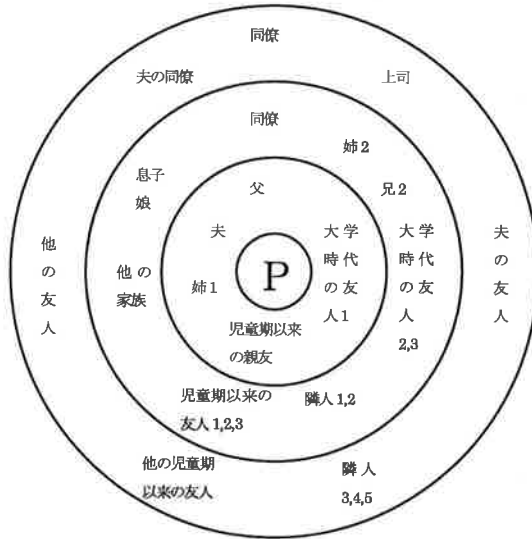


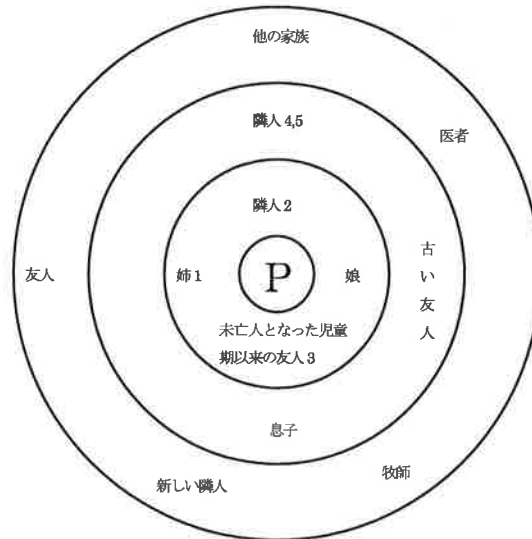
Figure 1-6 コンボイ (Kahn & Antonucci, 1980)

このようなコンボイの構造は生涯を通じてどのように変化するのだろうか。第1の同心円の人の喪失は死や絶交などの結果である可能性が高く、第2、第3の同心円の変化は役割や居住地の変化を反映する傾向がある。Figure 1-7は同一人物の異なる2時点でのコンボイを示した図である (Kahn & Antonucci, 1980)。上の図は2児をもつ既婚女性の35歳の時のコンボイ、下の図は75歳の時のコンボイを示している。この既婚女性の例の場合、全体的に見てコンボイの成員の数が老婦人になった時に減少していることが分かる。そして、役割の変化に依存せず固定的とされる第1の同心円でさえも、両親や配偶者の死亡により、娘や親しい友人へと構成員が変わっている。





35歳、既婚、2児をもつ女性



75歳、未亡人、成人した2人の子どもをもつ上図と同一の女性

Figure 1-7 生涯発達におけるコンボイの構成の変化例—ある女性の生涯の異なる2時点でのコンボイ (Kahn & Antonucci, 1980)

## 2-2 社会的コンボイに関する研究

Moen & Hernandez(2009)はほとんどのライフコース研究において、経済的な問題や、研究デザインの困難、継時的な変化の有無から、個人よりも集団を調査する傾向があることを示している。しかし、ライフコースは個人間の相互作用によって規定されることが想定されるので、社会的コンボイを検討する必要がある。Moen & Hernandez(2009)の社会的コンボイに関する研究についての検討について概観する。

分析の方法についてみると、多くの社会科学は、ある時点での2つ以上の変数の関係を分析する。例えば、回帰分析などである。長所としては、興味がある変数とは関係の無い要素の効果を「統制すること」を可能にする。短所として、人生は、孤立している変数としてではなく、相互に依存している社会システムとしてつながっていることを無視する傾向がある。

第1の問題として、研究対象の個人が埋め込まれているのはどのような社会的関係システムなのだろうか、ということがある。

関係性文脈の影響についてみてみると、ライフコース研究では、文脈における人生について理論化している。社会的コンボイは、その文脈の主要な部分である。社会集団の中に個人を位置づける2つの量的方法は、① 階層線形モデリング「マルチレベル・モ(hierarchical linear modeling)(HLM;デリング)」、② ネットワーク分析などがある。

第2の問題として、夫婦、家族、ネットワーク、または作業グループが、システム、あるいは個々人のゆるい集まりとして機能しているか、ということがある。このような問いにより、個人から、より上位レベルの単位へ関心がうつる。

方法論的な難点として、関係のある2人以上からの情報が統計的に独立していない、ということがある。真の関係性をあらわす変数を作成することによって、この問題を避けることが可能である。例えば、差得点(例えば、夫の年齢から妻の年齢をひいたもの)、比率(夫の給料によってわった妻の給料)、価値に

基づく類型(例えば、配偶者両方が信心深い、夫だけ信心深い、妻だけ信心深い、夫婦両方とも信心深くはない)などがある。

Elderは、ライフコース研究で重要なことは的確な疑問を尋ねることとしている。興味のある現象が起こっているより大きい文脈を調べる。例えば、サンプルの性質は何か、他のだれが影響を受けるのかなどである。このような「思考実験」によって、新しい疑問と予期していなかったパターンが発見できる。

「選択のバイアス」の可能性(関心をむけた特定の変数についての値が研究されているサンプルの中に入らないこと)を考えるのは重要である。選択のバイアスは、調査されるグループの中に入ったり外に出たりする人々の自己選択を反映している。例えば、個人は、結婚や離婚など、ある夫婦の中に入るか出るかを彼ら自身が「選択する」。

また、時間を経て追跡したパネル・データも、だれがサンプルをやめるか、だれがサンプルのままであるかによって、選択のバイアスがある。

利用可能な社会科学情報(データ)のほとんどは個人に関するものである。しかし、関係性を理論的・分析的モデルにいれる4つの方法は、(1)経時的な関係性の人口統計的および歴史的な傾向に注目すること、(2)ある人から他の人へのクロスオーバーを調査すること、(3)集団レベルの適応方略を理論化して精査すること、(4)トラジェクトリと移行を考慮すること、がある。

(1)リンクされた人生の経時的な人口統計学の研究については、経時的なトレンドとして、その母集団における人口の様々な下位集団ごとの結婚率や出産率を示す、国勢調査や他の時系列データをもちいている。

この方法で調査されることができテーマは、結婚あるいは親になった平均年齢、離婚率と再婚率、共稼ぎか片親家庭の割合などがある。余暇時間の量や区分と同様に、有償労働と無償労働の男女による分担のトレンドの研究を可能にする生活時間データである。

(2)ダイナミックなクロスオーバー効果の研究については、クロスオーバー効果の視点からみると、人生がリンクされているメカニズムは、特に明らか

である。例えば、Almeidaらは、ある世代(両親)から次の(子供)までのストレス・クロスオーバーについて検討した。仕事における夫のコンフリクトの経験が妻のストレスの経験に影響し、逆に妻のストレスが夫の仕事のコンフリクトに影響するかどうか、についてデイリーダイアリー法を用いた。調査データを用いることでクロスオーバー効果を研究した。他の例としては、夫婦の片方が年配の親類を世話するのに関わるとき、このことがクロスオーバーして配偶者のウェルビーイングに影響するが、この影響は介護者が夫であるか妻であるかによって異なる。

(3) 適応の方略を研究については、家族レベルの適応方略の概念を組み込む。例えば、失職、子どもの誕生のようなことが家庭に起こると、関係と役割はどのように変化するだろうか。雇用に関する決定は、様々な夫婦レベルの適応方略の1つの例を提供している。適応方略を研究する有益な方法の1つは、配偶者の行動を、回答者自身の行動の予測要因であると考えることである。例えば、子育てをしている家族では、一方の親が仕事で多く旅行することは、もう一方の親はそのような旅行が少なくなることを予測している。

(4) 時間とともに発展するトラジェクトリと移行としての人生については、Bronfenbrenne & Crouter (1983)は、人だけではなく文脈も、発達のコースを経験するとしている。リンクされた人生にライフコース的な関心をむけることによって、ジェンダーがさまざまな形で影響を及ぼしている方法を明らかにすることができる。例えば、家族の世話の調整、配偶者の相互作用、勢力関係、仕事・家庭のコンフリクトと向上、夫婦の共同の退職計画と移行、病気で虚弱な親類の介護などがある。

研究技法の適用可能性を考慮すると、リンクされた人生として、社会の中の個人を把握する社会的コンポイの主な技法は、ライフコース研究者にとって有用なものとなるだろう。「個人を社会の中に埋め込む」という社会的コンポイによる視点によって、実際に生じている現象に限りなく近いデータの提供が期待される。

## 2-3 社会的コンボイと自律性の関係

自律性 (autonomy) を動機づけの立場から考慮するときに、自己決定理論 (Self determination theory; SDT) が重要な示唆を与える。

DeciとRyanが中心になってSDTにおいては、主な4つの下位理論が提案されている。認知的評価理論(Cognitive evaluation theory; CET, Deci, 1975; Deci & Ryan, 1980)、生体的統合理論 (Organismic integration theory; OIT, Deci & Ryan, 1985a; Ryan & Connell, 1989)、因果オリエンテーション理論 (Causality orientations theory; COT, Deci & Ryan, 1985b)、基本的欲求理論 (Basic needs theory; BNT, Ryan & Deci, 2000) である。

SDTのなかでも、Deci & Ryan(1985a)は、学習における動機づけを自己決定の程度の高いものから、内発的動機づけ (intrinsic motivation)、同一化的調整 (identified regulation)、取り入れの調整 (introjected regulation)、外的調整 (external regulation)、無力状態 (amotivation) の順序で連続性のあるものとして提唱し、「自律性」あるいは「自己決定」を動機づけのパラダイムに組み込んで、「内発的動機づけ」と同義であるとした。後にVallerand & Bissonnette (1992)は同一化的調整より高い外的動機づけとして統合的調整 (integrated regulation) があるとした。

SDTは、欲求 (need) は生理的欲求と基本的心理欲求 (basic psychological needs) に分類される。さらに基本的心理欲求は生得的なもので、自律性の欲求 (need for autonomy) ・有能さの欲求(need for competence) ・関係性の欲求(need for relatedness)があり、これらの欲求の充足がウェルビーイング (well-being) を高めるとした。もしこれらの欲求が満たされない場合は、イルビーイング (ill-being) になる。このような仮説は、基本的欲求理論 (Basic needs theory; BNT) と呼ばれたSDTの下位理論において解説されている。現在では、基本的心理欲求から目標内容理論が派生し、基本的心理欲求理論 (Basic Psychological Needs Theory; BPNT) と名称が改められた。

したがって、動機づけのパラダイムの観点からみても、ライフコースを形成

する際に、自律性や有能さへの欲求等の個人に帰する属性のみならず、社会的コンポイがウェルビーイングを導く重要な要因なのである。自己決定しており、有能さを感じていたとしても、質の高い関係性がない限り、達成だけではなく、精神的健康を促進することは困難なのである。社会的コンポイと自律性の関係、すなわち、集団の働きかけと個人の心理状態の相互作用について、今後のさらなる実践的研究が望まれる。

## 引用文献

- Bronfenbrenner, U. & Crouter, A. C. 1983 The evolution of environmental models in developmental research. In P. H. Mussen (Series Ed.) & W. Kessen (Vol. Ed.), *Handbook of child psychology*, Vol. 1: History, theory, methods (4th ed., pp. 357-414). New York: Wiley.
- Cairns, R. B, Elder, G. H. Jr., Costello, E. J. 1996 *Developmental science*, Cambridge University Press. (本田時雄・高梨一彦監訳 2006 発達科学—「発達」への学際的アプローチ— ブレーン出版株式会社)
- Cairns, R. B, Elder, G. H. Jr., Costello, E. J. 1996 *Developmental science*, Cambridge University Press. (本田時雄・高梨一彦監訳 2006 発達科学—「発達」への学際的アプローチ— ブレーン出版株式会社)
- Clausen, J. A. 1993 *American lives : Looking back at the children of the Great Depression*. Free Press.
- Clausen, J. A 1995 Gender, context, and turning points in adults' Lives. In Moen, P., Elder, G. H., Jr. & Luscher, K. (Eds.). *Examining Lives in Context*, American Psychological Association, 365-389.
- Clausen, J. A 1998 Life Reviews and Life Stories. In Giele, J. Z. & Elder, G. H. (Eds.). *Methods of life course research: Qualitative and quantitative approaches*. CA: Sage Publications. (正岡寛司・藤見純子訳)

- 2003 ライフコース研究の方法—質的ならびに量的アプローチ 明石書店)
- Deci, E. L. 1975 *Intrinsic motivation*. New York: Plenum Press. (安藤延男・石田梅男訳 1980 内発的動機づけ：実験社会心理学的アプローチ 誠信書房) .
- Deci, E. L. & Ryan, R. M. 1980 The empirical exploration of intrinsic motivational processes. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* Vol. 13, 39-80. New York: Academic Press.
- Deci, E. L. & Ryan, R. M. 1985a *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- Deci, E. L. & Ryan, R. M. 1985b The general causality orientations scale: Self-determination in personality. *Journal of research in Personality*, 19, 109-134.
- Elder, G. H., Jr. 1975 Age differentiation and the life course. *Annual Review of Sociology*, 1, 165-190.
- Elder, G. H., Jr. 1985 *Life course dynamics : trajectories and transitions*. Cornell University Press.
- Elder, G. H., Jr. 1994 Time, human agency, and social change: Perspectives on the life course. *Social Psychology Quarterly*, 57, 4-15.
- Elder, G. H., Jr. 1997 *The life course as developmental theory*. Presidential Address.
- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and Society*. New York : Norton & Company. (仁科弥生訳 1977/1980 幼児期と社会 1・2 みずす書房)
- Erikson, E. H. 1959 *Psychological issues: Identity and life cycle*.

- International University Press. (小此木啓吾訳編 1973 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Erikson, E. H. 1982 *The Life Cycle Completed: A Review*. W. W. Norton & Company, New York. (村瀬孝雄・近藤邦夫訳 1989/増補版2001 ライフサイクル、その完結 みすず書房)
- Giele, J. Z. & Elder, G. H. 1998 *Methods of life course research: Qualitative and quantitative approaches*. CA: Sage Publications. (正岡寛司・藤見純子訳 2003 ライフコース研究の方法—質的ならびに量的アプローチ 明石書店)
- Holmes, T.H. & Rahe, R.H. 1967 The social readjustment rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, 11, 213-218.
- 本田時雄 2001 1章 ライフコースの概念と人間発達 2章ライフコースの規定要因 齊藤耕二・本田時雄編著 ライフコースの心理学, 2-32.
- Hopson, B. & Adams, J. 1976 Toward an understanding of transition: Defining some boundaries of transition dynamics. In Adams, J., Hayes, J. & Hopson, B. (Eds.) *Transition: Understanding and managing personal change*. Osmun & Co. Publishers.
- Hultsh, D. F. & Plemons, J. K. 1979 Life events and life-span development. In Baltes, P. B. & Brim, G. G. (Eds.), *Life-span development and behavior*. Volume 2. Academic Press.
- Jung, C. G. 1933 The stage of life. *The collected works of Carl G. Jung*. 8. 1960 Princeton University Press. 387-403.
- Kahn, R. L. & Antonucci, T. C. 1980 Convoys over the life course : Attachment, roles and support. In P. B. Baltes & O. G. Brim (Eds.), *Life-span development and behavior*. Vol. 3. Academic Press. 253-286. (東洋・柏木恵子・高橋恵子編集・監訳 生涯発達の心理学 第2巻 気質・自己・パーソナリティ 5章 生涯にわたる「コンボイ」



新曜社) .

- Levinson, D. J. 1978 *The seasons of a man's life*. Alfred A. Knopf. (南  
博訳 1992 ライフサイクルの心理学 上・下 講談社学術文庫)
- Minami, H. 1987 A conceptual model of critical transitions: Disruption  
and reconstruction of life-world. *Hirosima Forum for Psychology*,  
12, 33-56.
- Moen, P., and Hernandez, E. 2009 Linked lives: Social and temporal  
convoys over the life course. In: G. Elder, Jr. and J. Giele (Eds.)  
The craft of life course research, 258-279. New York: Guilford  
Press.
- 森岡清美 1996 ライフコースの視点 井上俊他(編) ライフコースの社  
会学(岩波講座現代社会学9) 岩波書店, 1-9.
- Ryan, R. M. & Connell, J. P. 1989 Perceived locus of causality and  
internalization : Examining reasons for acting in two domains.  
*Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 749-761.
- Ryan, R. M. & Deci, E. L. 2000 Self-determination theory and the facili-  
tation of intrinsic motivation, social development, and well-being.  
*American Psychologist*, 55, 68-78.
- Schlossberg, N. K. 1981 A model for analyzing human adaptation to  
transition. *The Counseling Psychologist*, 9(2), 2-18.
- Vallerand, R. J. & Bissonnette, R. 1992 Intrinsic, extrinsic, and amoti-  
vational styles as predictors of behavior: A Prospective Study.  
*Journal of Personality*, 60, 599-620.
- Wapner, S. 1983 Living with radical disruptions of person-in-enviro-  
nment systems. *IATSS Review*, 9(2), 133-148.

